

継手・仕口雛形の歴史的変遷過程

—継手・仕口雛形の研究 その3—

正 会 員 内 藤 昌*
正 会 員 岡 本 真 理 子**
正 会 員 渡 辺 勝 彦***
正 会 員 若 山 滋****

序

日本建築における木造構法の優れた伝統の一つは、軸組部材の接合技術体系すなわち継手・仕口である。本研究では、日本の伝統構法がほぼ完成に達したとみられる中近世に伝えられた建築書*1のうち特に継手・仕口雛形として記述のあるものを集成し、その記載内容を分析することによって、継手・仕口雛形の類型と系譜を探るとともに、我国の伝統構法における部材接合技法の体系としての歴史的変遷過程を明らかにしたいと考える。

前々論*2では、まず 21 本に及ぶ継手・仕口雛形の書誌的考察を行うとともに、各々の記載内容を継手・仕口の形態により 10 区分の基本型に分類し、更にこれらを総合して継手・仕口雛形の 4 類型を考察した。そして前論*3では、これら雛形に記載される継手・仕口の各々について、特に初出という観点から 5 類に区分し、その一般性に関して一応の判定を与え、更に基本型から数多くの複合型が派生する「組み合わせ」に関して基本型に 2 つのグループがあることを考察した。

本論では、雛形史料の時代的特性をより明らかにし、かつ継手・仕口の構法における雛形としての形成過程を探るために、まず部位別記載内容を分析し、継手・仕口の各称の変遷を考察し、本研究の総括を行って、その系統と特質を明らかにし、最終的には継手・仕口雛形の歴史的変遷過程を探ることとする。

なお本研究における史料 21 本は表—1 の通りである。

1. 部位別記載内容

継手・仕口は、木造軸組構法における部材の接合技法であり、雛形はその使用される部位に従って記述されるのが普通であるが、中には部位を明示していないものもある。本論では雛形本中もっとも主流を占めるⅠ類*4の、特に□『匠家仕口雛形』に記載される順に従って、考

する。□は、施工手順に沿って、床組、小屋組、軒廻り、室内造作という部位の順をとっている。ただし、柱は床組、小屋組、室内造作に記載があるが、ここではその位置を考え床組と小屋組の間におく。記載される部位は建築物の基本的な部材をほとんど含んでいると考えてよい。ただ不思議なことに棟木の継手・仕口の記載がない。これは他の雛形についても同様である。またその他のⅠ、Ⅱ類の雛形本においては、部位が一部省略されるものもあるが、ほぼ同内容であり、それ以外のⅢ類、Ⅳ類も記載される部位は□『匠家仕口雛形』の部位のうちである。これらのことを考え、本論では□に従って下記の順に考察する*5。

土台、足堅め、床束、大引き、根太、柱、貫、柱貫（頭貫）、肘木、桁、梁、束、合掌、母屋、垂木、隅木、木負、茅負、破風、裏甲、敷居、鴨居、長押、竿縁・回り縁、海老束、棚板、筆返し、框、建具

各雛形に記載される継手・仕口を上記の部位別に抽出し、整理したのが表—2 である。縦軸に部位別に抽出した継手・仕口を類型数、及び雛形数の多い順に示し、横軸に各継手・仕口が記載される雛形、及びその類型を示す。この表より各部位の継手・仕口の一般性を雛形数、類型数の双方から考察する。

表—1 史料番号及び史料名（カッコ内は、所蔵及び筆録年代）

①	「匠家仕口雛形」	(東京都立中央図書館蔵; 1728年)
②	「御作巧方仕口之図」	(東京都立中央図書館蔵; 1729年)
③	「雛目仕口控」	(東京国立博物館蔵; 1793年頃)
④	「御殿向作事堅書図解」	(岩瀬文忠蔵; 1800年頃)
⑤	「番匠秘事 規矩鑑集葉指口」	(国会図書館蔵; 1804~30年頃)
⑥	「匠家雛形 増補初心伝(上・中・下)」	(国会図書館蔵; 1812年)
⑦	「継手仕口控図」	(東京大学蔵; 1818~30年頃)
⑧	「修理大成 万宝柱建往来」	(東京大学蔵; 1823年)
⑨	「無名<仕口>」	(秋田県立図書館蔵; 1818~30年頃)
⑩	「番匠作巧往来」	(東京都立中央図書館蔵; 1848~54年頃)
⑪	「大工番匠往来」	(東京都立中央図書館蔵; 1848~54年頃)
⑫	「大工絵様 雑工雛形(初編・二編)」	(東京都立中央図書館蔵; 1850年)
⑬	「新造増補 大匠雛形大全<官殿之部>」	(内閣文庫蔵; 1851年)
⑭	「雑物規矩図」	(東京都立中央図書館蔵; 江戸末期頃)
⑮	「雛之図等 <写拾五枚>」	(金沢市立図書館蔵; 江戸末期頃)
⑯	「堂舎切縫方」	(東京都立中央図書館蔵; 江戸末期頃)
⑰	「明治新撰 隅矩独借古(上・中・下)」	(国会図書館蔵; 1882年)
⑱	「新撰軒回 大工雛形 全」	(国会図書館蔵; 1882年)
⑲	「継手雛形軒回之割 完」	(東京大学蔵; 明治初期頃)
⑳	「明治新選 番匠秘事雛形(上・下)」	(国会図書館蔵; 1887年)
㉑	「立川流匠家矩術 倭絵様集 参」	(東京大学蔵; 1894年)

* 名古屋工業大学 教授・工博
** 文化環境計画研究所・工博
*** 名古屋工業大学 助教授・工博
**** 名古屋工業大学 助教授・工博
(昭和 62 年 7 月 9 日原稿受理)

土台：継手は追掛け大栓継が3つの類型に載り、記載頻度も高く一般性が高いといえる。また、ほとんどが「鎌」、
「相欠き」系の継手であるのに、各類型に記載される継手はかなり異なっている。仕口ではⅠ類に多くの仕口が記載されているが、Ⅱ類はその半数、Ⅳ類では1つの仕口しか記載されていない。また「留め」がよく出現する。
足堅め：仕口ではⅠ類、Ⅱ類、Ⅳ類、と重なりをみせるが大分異なったものになっている。襟輪、扇柄、襟輪柄差しが一般性が高い。そのうちⅣ類には襟輪しか記載されていない。

床束：短柄差し、蟻掛けが一般性が高い。

大引き：Ⅰ、Ⅱ類とⅣ類とでは異なるものが記載され、しかも、Ⅳ類では1書にしか載っていない。

根太：仕口では、Ⅰ、Ⅱ類は同様の記載があるが、Ⅲ類、Ⅳ類はそれぞれ異なっている。

柱：継手は金輪継がⅠ、Ⅱ、Ⅳ類と雛形の記載数も多いので、一般性が高いといえる。また、十字目違い継、四方松皮継を除く継手は2類型以上に記載がある。仕口では抽出した部位中最も多く仕口の記載があり、「柄差し」は12種類と多い。しかし、香の図差し、重ね柄、待柄を除けば記載雛形数が少ない。香の図差し、雇い目違い、襟輪欠き、大入れ、引独鉗蟻の一般性が高い。Ⅰ類とⅡ類は類似しているが、Ⅳ類、Ⅲ類へと類似性が減少する。

貫：継手は二枚鎌継、四枚鎌継、込栓鎌継の一般性が高い。これらがⅠ、Ⅱ、Ⅳ類に記載され、しかも「相欠き」系の継手が多いことから貫の継手は体系が固まっていたと考えられる。仕口では小根柄が主流を占める。

柱貫（頭貫）：Ⅲ類が特異である。

肘木：「相欠き」系である。

桁：継手では両目違い鎌継が一般性が高いといえる。また「鎌」、「相欠き」系の継手がよく出現する。Ⅰ、Ⅳ類にはその類型にしか記載のないものが多く、逆にⅡ類はⅠ、Ⅳ類と全て重複している。またⅣ類は継手の数が多い。仕口では捻組み、渡り欠き、渡り顎掛け、落し掛りの一般性が高い。面腰、蟻掛けは3類に記載されているが雛形数が少ない。「相欠き」、「蟻」系の仕口が多い。Ⅰ類に対し、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ類とも異なる仕口も載せている。
梁：継手は台持継の一般性が高い。仕口では渡り欠きの一般性が高く、次いで襟輪柄差しである。その他の仕口は類型別に特異なものになっている。

束：襟輪柄差し、寄せ蟻が一般性が高い。「柄差し」が多い。

合掌：合掌組みの一般性が高い。

母屋：継手は敷面鎌継の一般性が高いといえる。仕口ではⅠ類以外はほとんど記載がない。

垂木：仕口は蟻掛け、平柄差し、渡り顎掛けの一般性が高いといえる。Ⅰ類とⅣ類の類似性が高い。

隅木：落し掛りの一般性が高い。

木負：継手は全て基本型そのものである。仕口は垂木彫り、欠込み、渡り顎掛けの一般性が高いといえる。

茅負：継手は芒継と茅負鎌継は同じもので、これらの一般性が高い。また見え掛りをかなり意識するものである。

破風：仕口は摺み蟻の一般性が高い。その他の仕口は類型ごとに特異なものである。

裏甲：類型ごとに異なっている。

敷居：Ⅰ、Ⅱ類は類似するが、Ⅳ類では異なる仕口が記載されている。

鴨居：仕口では大入れ、香の図差し、鬢面の一般性が高いといえる。Ⅰ、Ⅱ類の類似性が高い。Ⅳ類だけは敷居仕口とほぼ同様になっている。

長押：継手は箱台持継が雛形数は少ないが、3類型に属しているため一般性が高いといえる。仕口では襟輪、雛留め、枕捌き、目違い留めの一般性が高いといえる。Ⅰ、Ⅱ類は類似性が高いが、Ⅲ、Ⅳ類へと低下する。

竿縁・回り縁：継手は半鶯竿車知継、三方箱目違い竿車知継の一般性が高いといえる。芋継以外は「竿車知」、「殺ぎ」あるいはその複合された継手が記載されている。仕口ではⅠ、Ⅱ類の類似性が高い。

付書院として海老束、棚板、筆返しの記載がある。海老束と棚板の仕口は寄せ蟻、棚板と筆返しの仕口は吸付き蟻棧であり、棚板の端部は端燕である。

框：継手は各類型で異なるが、全て見え掛りを意識する継手である。特に霞継と流れ継はその中でも特殊なものである。仕口では吸付き蟻棧、根太彫りの一般性が高い。

建具：仕口では落し鎌、二枚柄差し、面腰の一般性が高いと考えられる。

2. 継手・仕口名称の変化

本研究では雛形に記載された図による形態を判断の基として『日本建築辞彙』*6及び『建築大辞典』*7によって用語を統一して雛形の名称を決定してきたが、史料に記載された名称はそれぞれ多様であり、決して統一されたものではない。ここではその名称の用語の変化について考察を行う。例えば継手・仕口の名称を構成する基本用語*8にも次のような表現が認められる。

「蟻」…蟻、蟻り、阿利、阿り、有、あり、アリ、ちぎり
「鎌」…鎌、釜、かま、カマ

「車知」…車知、鯨、志ゃち、シャチ

「目違い」…目違い、目違、目違イ、目違ひ、目ちがい、
女違

「柄差し」…柄差、柄指、柄、帯、ほぞ、ほそ、ホゾ、ホソ

「殺ぎ」…ソキ

「相欠き」…合搔、合欠、合カキ、相ガキ、アイガキ、アイカキ

「大入れ」…大入レ、大入

「留め」…留メ, 留, 留メ, 留, とめ, トメ, 堅メ, 堅
「掛け」…掛け, 掛ケ, 掛, 懸ケ, 懸, かけ, カケ, ガケ
「欠き」…欠キ, 欠, 掻, かき, カキ, ガキ, 可記
これらは主に用字の変化といえるが, 継手・仕口の名

称は, これらの基本用語が組み合わされているものが多
く, その過程で変化が増幅すると考えてよい。継手・仕
口の名称の差異には, 総じて次のような関係が設定でき
る。

表一.2.1 部位別記載内容

Table with 5 columns: 部位 (Part), 名称 (Name), 記号 (Symbol), 寸法 (Dimensions), 形状 (Shape). Rows include categories like 土手 (Soil), 仕口 (Joint), 口 (Opening), 足 (Foot), etc.

表一.2.2 部位別記載内容

Table with 5 columns: 部位 (Part), 名称 (Name), 記号 (Symbol), 寸法 (Dimensions), 形状 (Shape). Rows include categories like 木口 (Wood edge), 仕口 (Joint), 口 (Opening), etc.

表一.2.3 部位別記載内容

Table with 5 columns: 部位 (Part), 名称 (Name), 記号 (Symbol), 寸法 (Dimensions), 形状 (Shape). Rows include categories like 牙 (Tooth), 手 (Hand), 口 (Opening), etc.

- A：全く用語の異なるもの
 B：一部用語の異なるもの
 C：他の用語が付加（省略）されるもの
 D：用語の順序が異なるもの、及び用字の異なるもの
 （漢字、平仮名、片仮名）、送り仮名の有無や文字の異なるもの

A は名称として全く異なる用語が与えられているものとする。その中には「鬢面留め」を「隅指口留二枚柄」というように一つの仕口をより説明的に呼んでいるものも含む。B は例えば「蟻掛け」を「ありうけ」とするような変化であり、部分的に A と同様の変化をするものである。C は「三方目違い」を「三方箱目違い継」とするよう別々の用語が付加されたり、組み合わせられたある用語が省略されるもので、その名称の中の基本用語は変化しないものとする。D は継手・仕口の名称としてはほぼ同一であると考えることができよう。

各継手・仕口の初出雛形^{*8}における名称を基本として、これに対するその後の雛形に記載された変化名称の関係を上記の A～D の 4 項目に分類すると、A：30、B：49、C：76、D：187 である。次いで名称の異なるものは 119 である。

このように雛形に記載される名称は様々に変化するが、特に④【(鎌纏之図等)】では特異な名称が多い。例えば、相欠き鎌継をカナメツキ、台持継を追掛大持とし、更に追掛け大栓継、金輪継、尻挟み継を全て大持継として扱い、そして各々順に胴ゼン、鐘木、ハサミと付記している。要するに「相欠き鎌」系に「目違い」が付加されたものを総じて大持継としている。また両目違い鎌継を八子付鎌継というように、両目違いを形態から八子(羽根)としている。当史料は、加賀建仁寺派の家系、清水家伝来にかかわる唯一の継手・仕口雛形であり、それだけに概して江戸系その他雛形との相違ができた結果と判断される。

その他の雛形について掲げれば、半鳩竿車知継については、Ⅰ類本では竿継、②でのげ継と記載され、複合された型のうち片方だけの形態で名称を表している。更に②では鬚継ものげ継として扱われている。④では竿車知継を渡りホゾと、「竿車知」を「柄」と呼んでいる。追掛け継を④では置掛鎌、⑤では追掛鎌継と記載されていて、略鎌継の名称へと変化していく過程と考えられる。⑥、⑦では四方蟻継を四方ちぎりと記載している。またⅠ類では両目違い片車知鎌継に対しては両目違い鎌継の横に図示し「片車知にも」と付記している。

雛形に記載されている名称が時代とともに変化していったものとして、入輪から襟輪、送り大栓継から追掛け大栓継、垂木欠きから垂木彫りなどがあり現在ではすべて後者の名称を用いている。また史料とした雛形での変化はみられないが現在の名称と異なるものとして、碎

き蟻は現在では寄せ蟻、隅切柄は地獄柄、同士鎌継は二枚鎌継、隅留めは平留めなどがある。したがって、そうした現在名は少なくとも明治時代後期以降のものと考えられる。

3. 継手・仕口雛形の系譜

本研究の総括として、前々論、前論、及び本論で考察してきた記載内容及び書誌的考察を総合して、中・近世に伝えられた継手・仕口雛形の系譜について考察する。

本研究における史料 21 本は、前々論で示したように継手・仕口雛形として、Ⅰ類 6 本、Ⅱ類 6 本、Ⅲ類 4 本、Ⅳ類 5 本に分けられる。Ⅰ類のうち、①【匠家仕口雛形】は享保 13 年に筆写されており、これは、継手・仕口を体系的に網羅している点で、雛形として完成度が高く、また後世に与えた影響が大きい。加えて「写し」と明記されることから、それ以前の元禄頃には原本が存在していたのではないかととりあえず考えられる。さらに⑦【継手仕口絵図】では建築機能別の継手・仕口を付記している点、Ⅰ類本中でもやや別系統と考えられる。あえていえば、①の建仁寺派(甲良家)の系統に対して、四天王寺流(平内家)を意識した成果であるとも考えられるが、技術的内容において本質的相違はなく、むしろ推定される①の原本からの平内家における一展開課程に位置づけるべきであろう。⑧【(仕口)】は、①に対して敷居、長押、竿縁・回り縁、建具のような室内造作の一部部材が省略される。または記された名称等にやや簡略化の傾向がみられる。⑨【組物楯規矩図】では記載内容は⑧で省略された部材がそのまま省略され、明らかに⑧の写しであるが、⑧では部材の隠れる部分の点線が実線となり簡略化される。しかし、付記された名称等は⑧の簡略化されたものではなく、①の写しである。明治になると木版化され、⑩【継手雛形軒廻之割完】、⑪【立川流匠家矩術倭絵様集】の 2 書が刊行されている。⑨では貫、④では貫、破風、敷居が全く省略される。この他各部材で一部省略されている継手・仕口がある。また⑨での名称で「鎌」を「カキ」というまちがいが、⑫に訂正されずに転載されている。このようにⅠ類本では明治になって木版化されるとともに内容が退嬰化しているといえる。

Ⅱ類は、Ⅰ類から派生したものと考えられ、その記載内容からは 3 系統に分けて考えることができる。まず第一の系統は⑬【継手仕口控】から⑭【修理大成万宝柱往來】である。⑮は木版化にとまない、記載内容が⑬の 1/4 程度に減少し各部材の一般的代表例を示すにとどまり、いわゆる「往來物」の性格が強くなっている。第二の系統は⑯【番匠秘事規矩鑑集帯指口】から⑰【堂舎切組方】、⑱【明治新選番匠秘事雛形】である。⑲は⑬とほぼ同内容のほか雛形の前半部分に新たな継手・仕口の図が記載される点で前系統とは異なる。⑲の次の⑲、⑲にいたってはその部分のみの記載となり、体系的に捉

えられていないといえよう。㉔は木版本となり、㉕の二（一丁）頁分を一頁（半丁）に載せている。第三の系統としては、明治15年に刊行された㉖『新撰軒廻大工雛形上』が1書のみ存在する。これは継手・仕口の記載が少なく、題名に「軒廻」とあるように軒廻りに構法的扱いとして継手・仕口が付加されているものである。要するに上記Ⅰ・Ⅱ類は強い相関が認められ、しかし、全期を通じて総合的体系性をもっており、継手・仕口雛形の技術的な基幹をなしており、特に「匠家仕口系」と称しておきたい。

Ⅲ類では文化9年に㉗『匠家雛形増補初心伝』が木版本として刊行され、ついで㉘『大工絵様雑工雛形』、㉙『新選増補大匠雛形大全』、㉚『明治新撰隅矩独古中・下』がそれぞれ刊行され、これを「初心伝系」と名づける。Ⅰ、Ⅱ類の「匠家仕口系」は㉛に斜投法をもちいているのに対し、正投法を用いて図示している点が大きく異なる。また㉛で記載されている部材も約1/3程度である。㉛では1図のみしか記載がない。㉜は㉛の図より3図省略される他は内容に変化はみられない。明治になってから刊行された㉝は4図の記載しかなく、しかも同内容のものは1図だけで、他は斜投法を用いての図で、そのうち2図がⅡ類の㉛と同様のものである。㉞、㉟は同時期の刊行で、㉞に斜投法が用いられたことにより、本来主流をなす「匠家仕口系」の系統が影響を与えたものと考えられる。いずれにしても、本類は、㉛の普及過程に位置づけられ、㉛がそれぞれの題名のごとく初心者用に編纂され、Ⅰ、Ⅱ類本と根本的に異なって、継手・仕口の体系性に乏しく、大略の内容を記すに過ぎない特質が指摘され、よって「初心伝系」と呼べる一群である。

以上Ⅰ、Ⅱ類の「匠家仕口系」、Ⅲ類の「初心伝系」に属さないものをⅣ類として「雑録系」とする。㊱『御作事方仕口之図』、㊲『御殿向作事堅書図解』、㊳『番匠作事往来』、㊴『大工番匠往来』、㊵『（鎌纏之図等）』がこれにあたる。㊱は継手・仕口図に4面の正投象をもちいており、他の全ての雛形と異なる。また、記載内容の約9割が継手によって占められるのも特徴の1つである。㊲は継手・仕口とともに構法を表す図が全体にわたって付記されている。また、題名の示すように葺股、亀之尾、虹梁の図も記載され、他と異なり「御殿向」の記載内容に偏っているところに特徴がある。そして㊱とは対称的に仕口の記載が約9割を占める。㊳と㊴とは、㊵で図が全く省略されている点を除けば同内容である。㊳、㊴ともに仕口の記載は1図しかなく、他は継手のみであり、それも柱、竿縁・回り縁、框のような見える部材、特に室内造作についての記載内容である。「見え掛り」を留意した継手が記載される点、これらが出版された江戸末期においては継手・仕口の意匠性が重視される時代的特徴が指摘されよう。㊵は一般的な継手・仕口の他に、

障子の組子、床板の合わせ方などを収録している点、特に室内意匠に留意するものである。

4. 継手・仕口雛形の歴史的特質

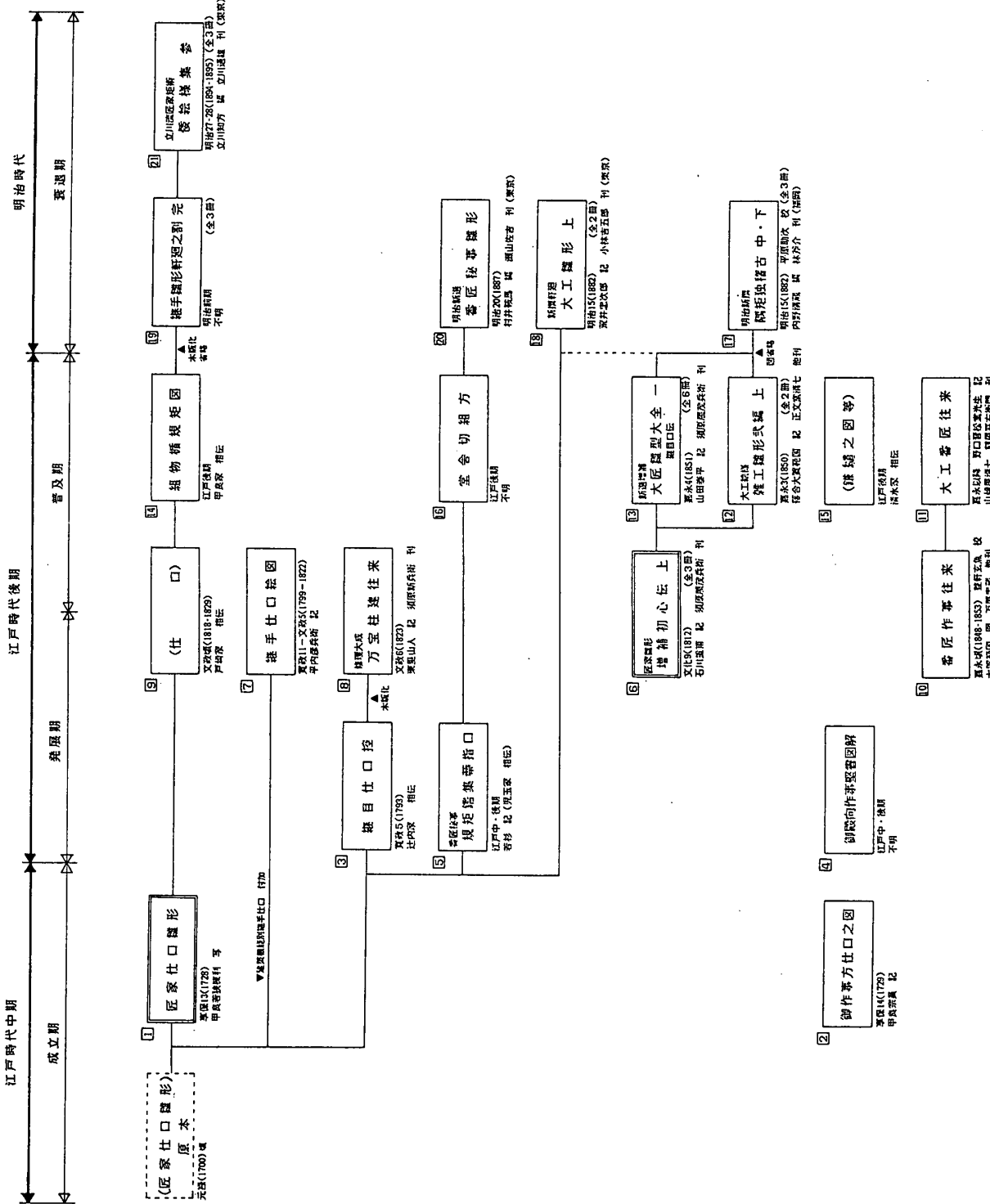
以上継手・仕口雛形に関する諸史料をその技術的内容の分析を含めて系統的に考察してきた。そこで最後に、そうした史料が成立・展開ないしは普及・衰退した過程についてそれぞれに歴史的特質を論ずる。

わが国の建築書が約500本近く知られる現在、本稿であつかった継手・仕口雛形に類別された21本は、その数において決して多いとはいえない。しかもその記述年代が江戸時代前期をさかのぼるのは皆無であり、最古の享保13年㊶『匠家仕口雛形』にその原本が推定できるにしても、元禄期（1700年頃）をそう遠くさかのぼるものではないのである。要するに、建築書としての継手・仕口雛形は、大工としての職能意識を記す「日本番匠記系本」⁹を先駆とする中・近世木割書の主流からすれば、極めて後発のものとして判定せざるをえない。あえていえば、木割書の多くがそうであるように、いわゆる「秘伝書」の範疇において他の技術との優位性を誇り、特に重視される建築書の類ではなかったと考えられる。

それでは逆に建築書として軽視されてきたのであろうか。そこで具体的に継手・仕口雛形を書誌学的に総括するならば、木割書に多見される秘伝書形式の卷子本が21本中僅か3例（㊷・㊸・㊹）と少ない。ましてや『匠明』にみられるような「一子相伝」的奥書は皆無で、概して実用性の高い横本・折本形式をとっているものが11本（㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺・㊻）と半数以上である点を改めて評価すべきであろう。わけでも㊱や㊲が江戸幕府作事方の史料であり、㊳・㊵・㊷にしても小普請方を含めた幕府の正統的技術陣による史料である以上、少なくとも軽視された建築書の類でなかったことは事実としてよいであろう。しかも初見の㊱ですでに後半の全史料の技術内容を大略カバーしている程の完成度を示している点に特に注目するならば、歴史的にみてより基本的であった技術内容を元来にもっていたが故に、江戸時代中期まで、あえて建築書として体系化される必然性がなかったものと考えられてくる。

そこで、建築書における江戸時代中期を大観してみると、中世末から桃山時代に先行成立をみた木割書は、例えば慶長13年（1608）『匠明』のように秘伝書の段階をへて、江戸時代初期においては大衆化され、明暦元年（1655）『新編雛形』として木版公刊されている。そして江戸時代中期に至ると、天和2年（1682）頃の『愚子見記』を典型とするように、従前の単なる木割書に加えて、家相・儀式・絵様・積算等を広域にあつかった建築百科事典のごときが幕府京都御大工頭中井家の技術を集大成した形でその頭棟梁（「受領之棟梁」）平政隆によって編纂されている¹⁰。こうした建築書を体系化する動

凡例
 1) [] は、独立した史料を示す。その中、各類型において後述に影響を与えた史料については、特に [] とする。
 2) [] は、その存在を推定できるもの。
 3) () 内事項は、推定または補注。



図一 継手・仕口雛形の変遷過程に関する編年模式

向は、元禄期を前後する頃において急速に一般化しており、江戸の幕府作事方ですでに『匠明』五巻を著わしていた平内家の四天王寺流に対抗して、甲良家が『建仁寺派家伝書』全14冊の大部を完成し^{*11}、これまた単なる木割書をこえた建築書の体系化を積極的にはかっている。併せて建築技術の普及に大きな影響力をもった木版本も、元禄12年(1699)『大工雛形』が実用的な横本形式をもって全5巻に集成公刊される^{*12}。

結局、江戸時代中期は、従前の木割書を中心とする建築書の段階から、家相・儀式・積算・絵様・小坪規矩等の類を加えて日本の建築学の体系を多方面に整えた時代であるといえる。継手・仕口雛形の初見本[㊦]が、そうした体系化の時代的趨勢を敏感に反映して、甲良家5代目を享保11年に継いだ棟利によって、その直後の享保13年に写されている点にこの際留意すべきであろう。すでに棟利の祖父宗賀・父宗(相)員によって甲良家の伝統技術を集大成した『建仁寺派家伝書』が出来した直後であり、本稿であつかった継手・仕口雛形の類もすでに史料として集成されていた可能性が認められる。ここに[㊦]の原本が、おそくとも元禄期(1700年頃)までには成立したと推定するゆえんである。この最終的な推定は、[㊦]が[㊧]の翌年に棟利の父宗員によって著わされている事実によって、さらにその蓋然性を強めているといえよう。

ところで、[㊦]は、その題名が示すように江戸幕府作事方の技術書である。あえて『御作事方仕口之図』と称してはいるが、現今でいうところの仕口の図示は、前半部に限られ、全体的にみれば、水盛から土台居・柱立・小屋組、それに塀・軒庇・土留・井戸・雪隠等を図示して、作事方の標準設計における構法教書とみるが妥当である。当時作事方は、寛永9年(1632)創設以来の大改革期にあっていた。元来は幕府の修理業をうけおう部門として設立された小普請方の台頭によって^{*13}、伝統ある作事方の新営工事がうばわれ、宝永6年(1704)作事方大棟梁達は連名で渡世成り立たぬ故工事の用命ありたき由を願いでているほどであった。そして正徳5年(1715)には、「定式御用」をも嘆願、小普請方同様恒常的な工事場確保を計っている。そうして享保3年(1718)^{*14}、ようやく小普請方と工事場をほぼ折半するようになり、併せて小普請方同様定小屋を設置して、従来の必要に応じての工事費支出を行っていた作事方の無計画性の弊害を改め、合理的な標準仕様による設計体系を整える最中であつた^{*15}。作事方の筆頭大棟梁としての家格を誇る甲良家の技術を集成した[㊦]の原本をもとにすると同時に、[㊦]が成立した歴史的背景には、上述幕府作事方建築生産機構の変革があつたことを、ここに特に指摘しておきたい。

かくて成立期をへた継手・仕口雛形は、Ⅰ類本において「匠家仕口系本」の発展が計られ、甲良家に準じて作

事方大棟梁の名門平内家の[㊦]に発展する。さらにⅡ類本としてこれまた作事方大棟梁の辻内家の[㊧]、そして作事方と競合した小普請方の名門兒玉家の[㊨]として展開をみている。したがってこうした18世紀後半期を継手・仕口雛形の発展期にあてることは是認されよう。

続いての19世紀前半期は、Ⅰ類本が[㊩]・[㊪]の正統を伝えると同時にⅡ類本で[㊫]の写しとして[㊬]、そして木版[㊭]を公刊している。さらに初心者向きには、Ⅲ類本の初心伝系をも公刊され、そのうえⅣ類本の雑録系には、[㊮]、[㊯]の往来本をも加えるに至る。要するに、継手・仕口雛形的全類系が出現したわけで、ここに普及期と規定できよう。

上記普及期を終えての明治時代は、Ⅰ類本に[㊰]・^㊱、Ⅱ類本に^㊲・^㊳、Ⅲ類本に^㊴がそれぞれ刊行されるが、いずれも前例を抄録したものに過ぎず、技術内容に新たな展開はない。しかもⅣ類本は消失してしまう。よって継手・仕口雛形の衰退期とみなされる。

以上により、継手・仕口雛形の変遷過程を総括して編年模式化したのが図-1である。

結

本研究では、我国中・近世に伝えられた大工書のうち21本に及ぶ継手・仕口雛形をまず書誌的に考察し、これを基本にして雛形を4類型に分類した。また記載内容から、継手・仕口の形態により蟻、鎌、竿車知、目違い、柄差し、殺ぎ、相欠き、大入れ、留め、その他の10区分の基本型を導き、その分類別記載内容を考察し、更に継手・仕口の初出により分類し、その一般性、特殊性を論じ、かつ基本型から複合型にいたるメカニズムを形態的、力学的側面により考察した。次いで雛形における継手・仕口の記載内容を部位別に明らかにし、名称の変化を考察し、更にこれらを総合的に考察することにより継手・仕口雛形の成立期から衰退期に至る歴史の変遷過程を具体的に明らかにした。

本研究の遂行に当たり、大成建設伊藤真一氏、鹿島建設古市浩規氏の御協力を得たことをお断りし、謝意を表する。

注

- 1) 内藤 昌「大工技術書について」建築史研究第30号昭和36年10月における巻末リストにあるものにその後の蒐集分を含めている。
- 2) 内藤 昌、渡辺勝彦、若山 滋「継手・仕口雛形の書誌と類型 継手・仕口雛形の研究その1」日本建築学会計画系論文報告集 昭和61年2月360号
- 3) 若山 滋、渡辺勝彦、内藤 昌「継手・仕口の基本型と変化型、複合型 継手・仕口雛形の研究 その2」日本建築学会計画系論文報告集 昭和61年12月370号
- 4) 2)による。
- 5) ここにとりあげたのは他の雛形にも多く記載される基本的な部位のみである。

- 6) 中村達太郎：日本建築辞彙，丸善，明治 39 年
- 7) 建築大辞典，影国社，昭和 51 年
- 8) 基本型を意味する用語，及び基本的な付属語
- 9) 日本番匠記系本は，日本最古の建築書で，Ⅰ～Ⅳ 類の系譜が知られ，最古のⅠ類は，15 世紀後半期をさかのぼると推定される。渡辺勝彦・内藤 昌「日本番匠記系本の類型」『日本番匠記系本の系譜』日本建築学会論文報告集第 335, 348 号昭和 59, 60 年
- 10) 岡本真理子・渡辺勝彦・内藤 昌「愚子見記の成立」日本建築学会論文報告集第 369 号昭和 61 年
- 11) 内藤 昌「大工技術書について」建築史研究第 30 号昭和 36 年
- 12) 岡本真理子著日本建築古典叢書 5『近世建築書-座敷雛形』大龍堂書店昭和 61 年
- 13) 鈴木解雄「江戸幕府小普請方について」日本建築学会論文報告集第 60 号昭和 33 年，内藤 昌・中村利則「江戸幕府小普請方の成立過程について」日本建築学会昭和 44 年度大会学術講演梗概集，内藤 昌著『近世大工の系譜』べりかん社昭和 56 年
- 14) 『御作事方代々録』なお，これに関する論考には，内藤 昌著『江戸の都市と建築』昭和 47 年毎日新聞社刊がある。
- 15) この改革は，さらに進んで，宝暦元年（1751）には公儀

作事における諸色人用品価格・標準工賃・同工数の基準を定めた「本途帳」が制定されるにいたる。西 和夫「本途と本途帳」『本途帳の成立とその年代』日本建築学会論文報告集第 120, 121 号昭和 41 年。作事方で㊦, ㊧のような技術書が標準設計書として形成されることを前提とすると，本途帳成立の歴史的な必然性がよく理解できる。

参考文献

- 1) 岩楯 保「継手・仕口より見たる技術史研究序説」日本建築学会九州支部 昭和 49 年 2 月
- 2) 岩楯 保「鎌継型式の時代的変遷について その 1」日本建築学会中国・九州支部 昭和 50 年 2 月
- 3) 岩楯 保「鎌継型式の時代的変遷について その 2」日本建築学会九州支部 昭和 51 年 2 月
- 4) 岩楯 保「継手・仕口（柱-頭貫）形式の歴史的変遷における数値化の試み」日本建築学会九州支部 昭和 52 年 2 月
- 5) 源愛日児「継手・仕口の研究を通してみた近世大工書」日本建築学会大会 昭和 58 年 9 月
- 6) 源愛日児「中世遺構にみる略鎌系継手・仕口の変遷に関する研究」日本建築学会論文報告集 昭和 60 年 10 月 356 号

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 389.1 : 694.2

THE HISTORICAL PROCESS OF "TSUGITE-SHIKUCHI-HINAGATA"

A study on the architectural manuals "tsugite-shikuchi-hinagata" Part 3

by **AKIRA NAITO**, Prof. of Nagoya Inst. of Technology, doctor of engineering, **MARIKO OKAMOTO**, Inst. of Cultural Environment and Design, doctor of engineering, **KATSUHIKO WATANABE**, Associate Prof. N.I.T., doctor of engineering, **SHIGERU WAKAYAMA**, Associate Prof. of N.I.T., doctor of engineering, Members of A.I.J.

"Tsugite-shikuchi" is the joint technology in Japanese wooden structural building system. There remain 21 manuals about "tsugite-shikuchi" written in around edo period. Those manuals explain the level and the standard of the timber joint system at that age in Japanese traditional history. We reported the bibliography of manuals "tsugite-shikuchi-hinagata", and the technical characters of each 129 types of tsugite-shikuchi listed in manuals in former reports.

In this report we analyze tsugite-shikuchi at each component in building system, and study variation and change of names of them. Further we study genealogy and historical process of formation, development, utilization and decline of manuals overall these reports.